



スケート部の早朝練習風景

朝、五時。外はまだ真つ暗だ。眼の瞳のまま服に着替え、自転車をこいでリンクに向かう。スケート部は朝が早い。貸し切りで練習するにはこの時間帯しかないからだ。まだ薄暗い時間のリンクは、気持ちが悪く引締められるような緊張感と心が洗われるようなすがすがしさがある。

六時。まずフィギュア部門の練習が始まる。真つ白な氷の上で、思い思いのコスチュームを着た選手達は、自分を表現する。目の輝きが違ってくる。ジャンプをする。もつともつと高く跳びたい。体が意志を持ち始める。スピンをする。もつときれいにみせたい。意欲が沸いてくる。いつもは寒いだけのリンクが熱気でいっぱいになる。

そうこうするうちに、七時三十分。ホッケー部門の練習に交替だ。入り口で挨拶を交わす。一瞬すれ違うだけなのだが、仲間を見るとなんだか安心する。リンクからは気合いの入った声の間こえ始める。美しさを表現しようとしていたリンクは、戦いの場へと変化する。陸上ではみられない生き生きとした力強い顔で、皆が一丸となって走る。チームでプレイするスポーツの楽しさを感じる。

そして九時三十分。練習を終えた選手たちは、Gパンをはき、鞆を下げて学生の顔に戻り、朝の慌ただしい外界へと出ていく。  
(みき・まゆみ)

スケート部

朝

経済学部経済学科三年 三木 真由美

スキー部

何も見えない、何も聞こえない

工学部第一類(機械系)三年 上田 博之

町中では、春の風が感じられる三月中旬、スキー部の最大目標である全関西学生スキー選手権大会が、妙高高原赤倉温泉スキー場で行われた。町中では春でも、まだここは「冬」である。回転競技が行われる試合当日の朝、外に出るとまだ顔を切りさくような風を感じるが、それでも昨日念入りにワックスを塗った板をかつぎ、リフトを乗り継いで、試合の行われるピステへと向かう。天候は雪。ガスがかかっている視界も悪い。そんななかで、スタートの準備をし、ゼッケンと呼ばれ、スタートハウスの中へと入ってゆく。スタートハウスからは、前の日に雪とは思えないほどに固められた堅い急斜面のアイスバーンと、どこを滑ったらよいか分からないほど無数に立てられたポールだけが見える。中に入ると、そこにいるのはスターターの人だけ。スタート直前、なんともいえない心地よい緊張感と感動がこみ上げてくる。

そんななか、「レディー、ゴー」とスタートターの声があった瞬間、気合いもろとも光電管のバーを切る。その瞬間から何も見えなくなり、何も聞こえなくなる。あとは百分の一秒でも速くゴールへ向かう。



妙高高原赤倉温泉スキー場にて